

嬭恋村鎌原における天明三年（1783年）浅間山噴火
流死者供養の成立と変遷

井上雄斗・早川由紀夫

**History of the memorial service at Kambara for casualties
by the 1783 eruption of Asama Volcano**

Yuto INOUE and Yukio HAYAKAWA

嬭恋村鎌原における天明三年（1783年）浅間山噴火 流死者供養の成立と変遷

井上雄斗¹⁾・早川由紀夫²⁾

1) 伊勢崎市立赤堀中学校

2) 群馬大学教育学部地学教室

(2018年9月26日受理)

History of the memorial service at Kambara for casualties by the 1783 eruption of Asama Volcano

Yuto INOUE¹⁾ and Yukio HAYAKAWA²⁾

1) Isesaki City Akabori Junior High School

Isesaki, Gunma 379-2204, Japan

2) Department of Earth Science, Faculty of Education, Gunma University

Maebashi, Gunma 371-8510, Japan

(Accepted on September 26th, 2018)

1 はじめに

浅間山北麓、群馬県吾妻郡嬭恋村鎌原（以下、鎌原と略す）にある観音堂では、49人の高齢の住民たちが3人から5人で12組の班を作り、2月を除き毎日交替で、遠方から来た観光客を茶や自家製の漬物で、もてなしている。彼らの所属する組織を「鎌原観音堂奉仕会」という。奉仕会の成立は、昭和五十四年（1979）とされ、2001年のときは99人で13組の班を作り、365日もてなしていた（三枝・早川、2001）。彼らは、鎌原が天明三年（1783）の浅間山噴火で受けた災害について観光客に説明している。

鎌原の住民たちは、天明三年（1783）浅間山噴火によって受けた災害を忘れない。彼らは、その時の災害を「回り念仏」と呼ばれる方法によって今に伝えている。「回り念仏」は、月の7日と16日に行われる地域行事である。200年以上も前の災害を伝承している稀有な行事であるが、いつ始まったのかは

分かっておらず、200年以上ずっと続いてきたか明らかになっていない。

鎌原は、天明三年七月八日（1783年8月5日）、浅間山北側から発生した土石なだれによって埋没した。鎌原の流死者は、三十三回忌にあたる文化十二年（1815）に流死者供養のために建立された供養塔に刻まれた戒名の数から477人だったことが分かる。生存者は93人だった。

先行研究として萩原（1982）は、浅間山噴火に関する史料から当時の被害状況、復興の様子、流死者の供養について、鎌原に限らず広い視野で研究しているが、回り念仏の成立時期や具体的な内容については記述していない。三枝・早川（2001）は、鎌原の人々が供養を続ける理由を住民の心情面に着目して研究しているが、当時の供養の様子にのみ着目しており、回り念仏の成立時期や長年にわたる供養の流れについてはふれていない。本稿では、三枝・早川（2001）の調査から14年が経過した回り念仏の

現状、その成立時期、供養の変遷を明らかにする。

2. 調査方法

2014年11月29日から2015年11月14日までの31日間、現地調査を実施した。鎌原観音堂奉仕会の人たちからの聞き取り調査や住民からの史料提供、観音堂内にある木板の赤外線撮影、回り念仏や供養祭に実際に参加することで情報を得た。奉仕会の人たちを核として人脈を広げ、催事には積極的に参加し、準備の手伝いをする中で交流を深め、住民宅にある蔵から古記録や写真などを借り受けた。聞き取りによる情報の場合は、複数の人物から情報を集めることで信憑性を確保した。木板の赤外線撮影については、駿河台大学メディア情報学部野村正弘教授に行ってもらった。木板の翻字については、群馬大学教育学部国語教育講座小林正行准教授にご協力いただいた。住民から借り受けた天明七年（1787）鎌原村の帳簿の解読は、群馬大学図書館の土師守氏にご協力いただいた。

参加した催事は以下のとおりである（表1）。

表1 井上が参加した行事

年月日	行事名
2014年11月30日	戸谷塚慰霊祭
2014年12月25日	念仏の練習会
2015年3月21日	彼岸の中日
2015年5月8日	花祭り
2015年6月7日	回り念仏
2015年8月5日	233回忌供養

調査で赤外線撮影を利用したのは、木板が、観音堂内にある囲炉裏の煙で燻され、煤で真っ黒になっており、判読が困難であったからである。野村教授に赤外線撮影をしてもらうことで文字がはっきりと読めるようになった。赤外線撮影については、野村（2016）が研究しているので、そちらを参照してほしい。

3. 鎌原における災害の前後

本章では、災害前の鎌原の様子と災害後の復興の様子について、今回の調査で得られた史料と既存の史料を使い明らかにする。

鎌原には、小高い丘の上に観音堂がある。これを「鎌原観音堂」と呼ぶ。鎌原観音堂の前には階段があり、この階段は土石なだれによって15段を残し、それより下は埋まってしまった。昭和五十四年（1979）の発掘調査で階段は50段あることが判明し、35段が土石なだれで埋まったことが分かった（萩原，1982）。住民によると、この階段を駆け上がった村人だけが土石なだれに埋まることなく助かったと言われているという。

鎌原観音堂の建立は、正徳三年（1713）であると住民は言っていたが、正否は明らかではなかった。今回の調査で観音堂の棟札と思われる木板を発見した（図1）。棟札とは、建築物の建造や修復をした際に、建築関係者や建築年月日などを記載する札のことである。木板には墨字で文字が書かれていたが、一部風化によって墨が落ち、欠落している箇所があった。赤外線撮影により、ある程度鮮明に文字が判読できるようになった。

木板には、「正□三癸□天 上□吾□□ 名主鎌原市□衛門〔梵字〕奉造立観音堂一字殊當所安全処 福聚海無量是故應頂禮 山崎三良右衛門」と記されていた（図1）。そして木板の下側には、「昭和四十八年□□□ 観音堂棟札□□□ 正徳三年は本年ヨリ 式百六十年□□□」とあった（図1）。下側に書かれていた字の筆跡は、上側に書かれていた字の筆跡と異なっており、おそらく昭和四十八年（1973）に加筆されたと思われる。正徳三年（1713）は、昭和四十八年（1973）より260年前で記載内容に間違いはない。

木板に書かれた墨字と似た文面が、鎌原村の山崎金兵衛が書いた「浅間山焼荒之日并其外家并名前帳」（萩原，1986）にあった。金兵衛は、「安政七年庚申年二月ひがんに右観音堂にて棟札相改め大勢にて見届け申候所、屋根替の節棟札押砕き候哉片形無之、左通りの棟札有之候事相違無御座候」と記した

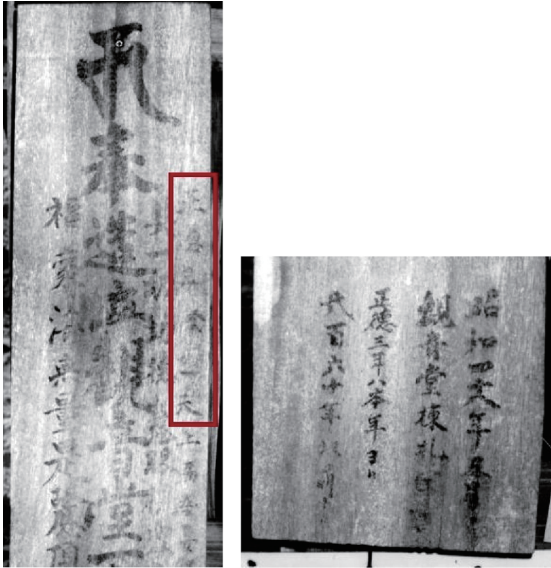


図1 観音堂が正徳三年（1713）建立であることを記す木板。左が木板の全体像、右が木板の下部である。線で囲んだ箇所「正三癸巳天」とある。

上で、「正徳三癸巳天 上州吾妻郡 名主 鎌原市左衛門 具一切功德慈眼視衆生〔梵字〕奉造立観音堂一字殊堂所安全処 二月朔日 山崎金兵衛 山崎三郎右衛門」という棟札の文面を載せている。金兵衛の文言を訳すと「安政七年二月彼岸の屋根替えの時に棟札を見つけたが、屋根替えをしている時に碎いてしまったようで片側がなくなりました。左の通りの棟札で間違いはない」と言っている。以上の金兵衛の証言から、正徳三年（1713）に観音堂を建立した時に設置した棟札は、すでに壊れて無くなっていることが分かる。今回の調査で撮影した木板と金兵衛が記した棟札の文面を比べると撮影した木板の墨字の欠損部分を補う事ができ、「正（徳）三癸（巳）天 上（州）吾（妻）（郡）名主 鎌原市（左）衛門〔梵字〕奉造立観音堂一字殊當所安全処 福聚海無量是故應頂禮 山崎三良右衛門」と書かれていたであろうことが分かる。撮影した木板と金兵衛の記した棟札を比較すると墨字の文面が異なっている。今回撮影した木板は、作成時期を特定することはできないが、鎌原観音堂の建立は、正徳三年（1713）と考えられる。

観音堂内で最も古いと思われる木板を見出した。宝暦十二年（1762）三月の寄進に関する木板である（図2）。これは、2枚で1つとなっている。仏殿と須弥壇を作るために寄進を募ったことが1枚目に書かれた内容から分かる。2枚目には寄進者120人の名前が書かれている。半兵衛という男性だけ「□め」という女性と連名で寄進している。定右衛門という男性だけは、桑井村に住んでいたようである。萩原（1982）は、名主山崎金兵衛が「浅間山焼荒之節之日并名前帳」の中で、宝暦十二年（1762）に観音堂須弥壇の寄進者名の数から天明三年（1783）以前の戸口が118軒だったと記していることを紹介している。今回撮影した宝暦十二年（1762）の寄進表が、金兵衛が天明三年（1783）以前の戸数を推測するのに用いた寄進表であると思われる。確かに半兵衛と連名で書かれている女性の名と桑井村の定右衛門を除けば、118人となり、木板に連名で書かれた名前は各家の代表者と考えれば、118軒が寄進したと考えられるだろう。しかし、宝暦十二年（1762）の寄進表は2枚ある。金兵衛は、1枚目に書かれた人の数は考慮していない。1枚目に書かれた人の数と戸数との関係は、分からない。宝暦十二年（1762）の寄進表は、災害前の鎌原の様子を知る史料であるため記録しておく。今回の調査では、寄進表の2枚目しか翻字することができなかった。

被災直後の鎌原を救ったのは、近隣の村の有力者だった。大笹村の黒岩長左衛門、千俣村の干川小兵衛、大戸村の加部安左衛門の救援の記録が残っている。吾妻郡大笹村にある無量院住職の書いた手記「浅間大變覚書」（萩原，1986）には、干川小兵衛と黒岩長左衛門の被災者救援の記録が残っている。小兵衛は、近隣から逃げてきた人々を家に招き入れ、世話をしたとの記録が残っている。鎌原からは、50人から60人逃げてきたとある。長左衛門は、被災者に米を与え、鎌原の世話をしたとある。3人は、この功績を称えられ、褒美として幕府から苗字帯刀の許可と銀を授かったことが、黒岩長左衛門が書いた「浅間山焼荒一件」（萩原，1986）に記録されている。根岸九郎左衛門の「耳袋」（萩原，1995）には、被災した鎌原の状況を見て、小兵衛、長左衛門、安



図2 宝暦十二年（1762）三月、仏殿と須弥壇を造作するための寄進に関する木板。2枚目が120人の名前が書かれた木板で、2枚目のみ翻字した。

左衛門の3人は、逃げてきた人々を各々の家で引き取り面倒をみた。そして、騒ぎが少し静まったところで、土石なだれで埋まった鎌原の跡地に、小屋を二棟建て、麦粟俵等を少し送って援助したとある。近隣の有力者の尽力により、鎌原を含め被災した村で生き残った人たちは、救われたことが分かる。

鎌原において救援のあとに行われたのは、家族の再構成であった。同じく、根岸九郎左衛門の「耳袋」(萩原, 1995) には、「初三人の者ども工夫にて、百姓は家筋素性を甚だ吟味致し、たとひ当時は富貴にても、元重立候者にこれなく候ては座敷へもあげず、格式挨拶等格別に致候事なれど、かゝる大変に逢ひて生残りし九十三人は、誠に骨肉の一族と思ふべしとて、右小屋にて親族の約諾をなしける。(略) 九十三人の内夫を失ひし女へは女房を流されし男を取合わせ、子を失ひし老人へは親なきものを養はせ、残らず一類に取合わせける」とある。「三人の者ども」とは、上述した、黒岩長左衛門、干川小兵衛、

加部安左衛門のことである。彼らは、救援用に建てた二棟の小屋で、生き残った93人に災害以前の身分の上下格式の違いをなくし同格平等と誓約させた上で、人為的に結ばせ、新しい夫婦、親子をつくり家族を再構成させた。

家族を再構成させる上で、夫を失った女は、女房を失った男と取り合わせたとあるのだから当然結婚式が行われた。家族を再構成させたことを裏付けるように、黒岩長左衛門の「浅間山焼荒一件」(萩原, 1986) には、結婚式の記録が残っている。天明三年(1783)十月二十四日に7組、十二月二十三日に3組の結婚式が行われたとある。

さらに「浅間山焼荒一件」(萩原, 1986) には、土石なだれで流れてしまった家を新築する記録が残っている。天明四年(1784)正月までに11軒の家が新築されたことが確認できた。被災から半年で家を新築するところまで復興したことが分かる。

今回の調査で、住民より鎌原村中の家長と思われ

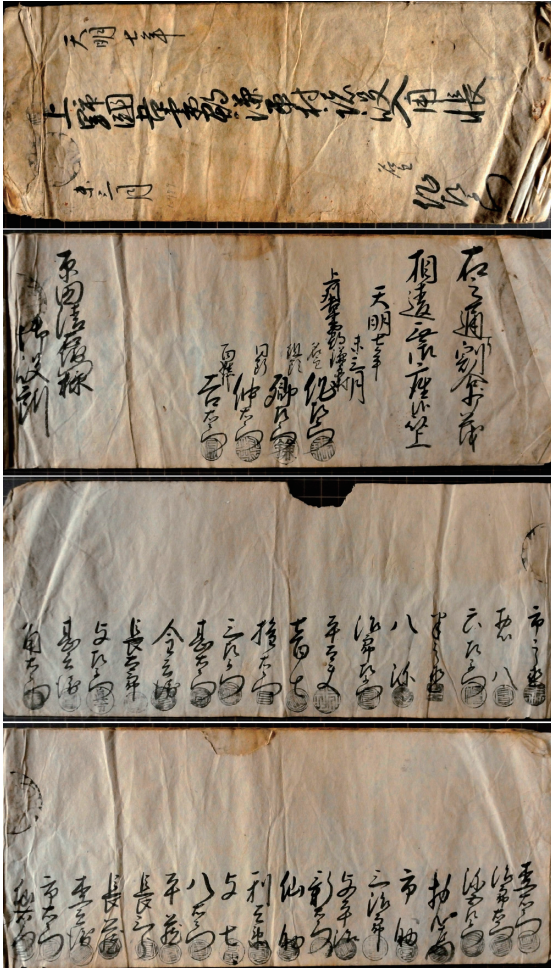


図3 天明七年（1787）三月に書かれた鎌原村の帳簿。表紙と最後の3頁を掲載した。最後の3頁に村中の家長と思われる名が38人分、連名で印鑑付きで書かれている（横沢英子氏提供）。

る名と印鑑が押された史料を借り受けた（図3）。題は、「上野國吾妻郡鎌原村諸没入用帳」とある。天明七年（1787）の村の帳簿で、天明六年（1786）二月十四日から天明七年（1787）一月十七日までの記録が残されている。最後に1軒につき鏝287文、1人に付き105文とあり、名主、組頭2人、百姓代を含めて、連名で38人分の名前が印鑑付きで記されている。おそらく連名の数と家の数は一致しているだろう。災害から4年後の天明七年（1787）には、家が38軒になっていたのではないと思われる。

以上の鎌原の復興の様子から、現在の住民は、災

害の時に生き残った93人の子孫であることが分かる。鎌原の住民たちは、生き残った先祖たちに特別な感情を持っており、大切に思っている。

4. 現在の回り念仏

本章では、回り念仏に実際に参加し、住民たちへの聞き取りから得た情報により明らかとなった現在の回り念仏について記述する。

回り念仏は、天明三年七月八日（1783年8月5日）の浅間山噴火によって発生した土石なだれで流死した477人の供養を目的としている（図4）。月の7日と16日に行われるのがしきたりだが、近年は時代背景の変化から勤め人が多くなり、平日が休めない理由から日付にこだわらず、週末の土日や祝日に行くことが多い。月に2回は必ず実施する。月のいつに行うかは、月初めに決めている。夏場は農業が忙しくなるため、7月、8月、9月7日は行わない。

回り念仏は、和讃会（念仏を唱える女性たち）が、当番の家（女性たちを迎える家）に集って念仏を唱え、その家からご馳走のもてなしを受ける。念仏を唱える女性たちをもてなす際にかかる費用は、5万円から10万円を必要とする。当番の家がその費用を負担する。当番は、村中の家々が時計回りに巡回して務める。それが回り念仏の名の由来である。和讃会に自分の家の関係者がいなくても当番は行う。当番は強制ではない。葬式があった家は1回飛ばす



図4 現在の回り念仏の様子。女性たちは鎌原多目的活動センターに集まり念仏を唱える。

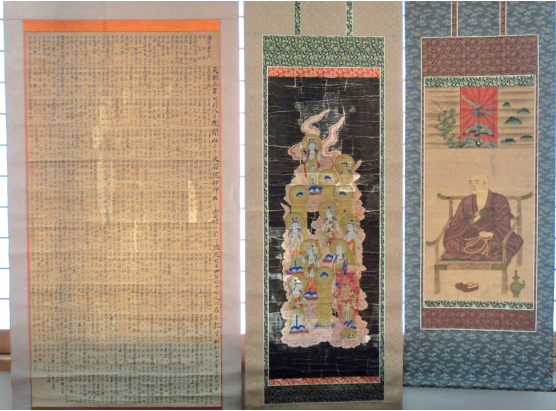


図5 回り念仏で使用される3種の掛軸。左から流死者477人の名が書かれた掛軸、十三仏の掛軸、弘法大師の掛軸である。



図6 現在の回り念仏の会場となっている鎌原多目的活動センター。平成六年（1994）に完成した。

決まりである。当番の家には、流死者477人の名が書かれた掛軸、十三仏の掛軸、弘法大師の掛軸、以上の3種類の掛軸が回されていく（図5）。以前は、念仏に使用する仏具も一緒に回されていたが、現在は回していない。当番が回ってくる頻度について男性は、「5～6年に1回、当番が回ってくる。」女性は、「最近は、3～4年で回ってくる。」と言っていた。14年前は、7年余りで村を1周していた（三枝・早川，2001）。14年間のうちに回り念仏の当番を受け持つ家が減少したことが分かる。

回り念仏は、女性しか唱えないのが特徴である（図4）。念仏を唱える女性たちは、「和讃会」という組織に所属している。年齢構成は66歳から90歳、人数は25名程である。和讃会がいつ成立したのか分からないが、住民によると最近できたようである。和讃会には名目上は、中心となる代表は存在しない

ことになっているが、取り仕切る人物は存在する。和讃会がなかった時は、今と同じで、名目上は中心となる人物はいないが、年長者が取り仕切っていたようである。唱える念仏は、ひとつではなく、現在は、18種類の念仏を唱えている（表2）。唱える念仏は、徐々に増えていった。回り念仏が成立した時に唱えていた念仏が、どれだったのかは分からない。女性によると、「5番目に唱える御念仏は昔からある。」「入定和讃までが浅間押しで亡くなった流死者の供養に関係する念仏だ。」という。

ここ数年、念仏を唱える女性、当番となる家は、ともに減少している。その原因として女性たちをもてなす際の負担が挙げられており、長年続いてきた回り念仏を継続させようと住民たちは工夫を凝らしている。

平成六年（1994）からは、家を会場にする負担を軽減するために「鎌原多目的活動センター」を会場として使うようになった（図6）。以前は、家を会場としていたため当番が変わるごとに会場も変わっていたが、現在は、当番は変わっても会場は鎌原多目的活動センターのままで変わらない。各家を会場としていた名残から、昔からある鎌原の家には、念仏を唱える女性たちを迎えるために大広間が備えられている。鎌原多目的活動センターは、1万5千円で借りられる。センターには、大鍋や大皿も完備されており、助かっているという。ある女性は、「家にある使わなくなった大皿たちを私は、負の遺産と呼んでいる。センターにあるから、もう必要ないからね。」と言っていた。それに合わせて、「うちにも沢山あるわよ。」と他の女性たちも口を揃えて言っていた。念仏に用いていた食器等は、念仏の時以外には役に立たないものであることが分かる。

平成九年（1997）からは、人材育成のために念仏の練習会が開かれるようになった。和讃会に参加したばかりの人に念仏を教えるのが目的である。練習は、11月から3月までの5ヶ月間、月2回行われている。多くの念仏を覚えるのは大変なのだという。実際に練習会に参加し、念仏を唱えるのがどれ程難しいのか、どのように念仏が継承されているのかを調査した。

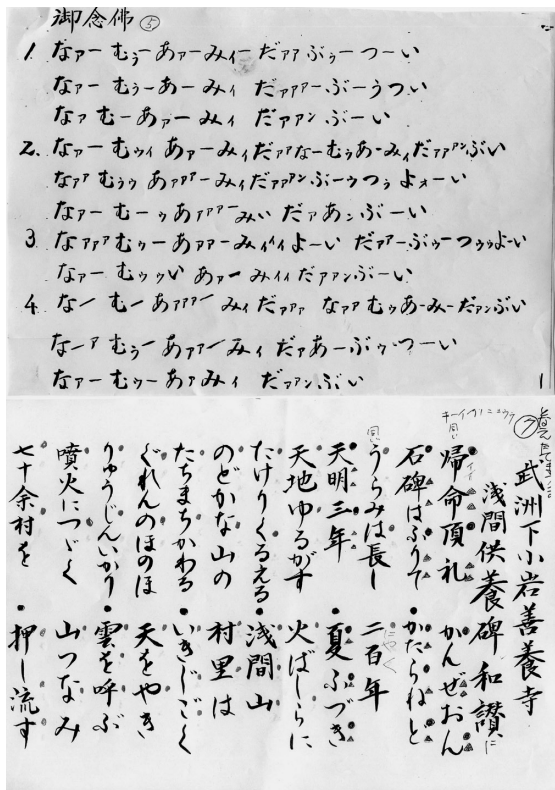


図7 念仏を唱える際に使用する楽譜のコピー。上が、表2の5番目の念仏の楽譜、下が14番目の念仏の楽譜。楽譜の右上の⑤⑦の数字は筆者が加筆した。下の楽譜に書かれている●の記号が鉦、▲の記号が鈴を鳴らす場所を指示している。

念仏を唱える女性たちは、念仏の詩や鉦・鈴を鳴らす箇所が記された譜面を持っている。平成五年（1993）に住民の男性が作った「鎌原念佛和讃帳」をコピーしたものである（図7）。この和讃帳が作られる前は、個人的に念仏を聴いて書き写し、譜面にして所持していた人もいたそうだが、きちんと書き記し公開したのは、この譜面が最初であるという。女性たちは、この譜面を見ながら念仏を唱えていく。

念仏を完璧に唱えるためには、次の2つを習得する必要がある。「節」と「詩」である。節は、音程である。節を覚えるのが難しいのだという。詩は字として書き写し、譜面となっているが、節に関する説明はない。練習会では、念仏を唱えることのできる女性の声を聴いて、一緒に何度も唱えることで覚えていた。特に難しいのが5.「御念佛」であると女

表2 現在の回り念仏のプログラム

13:00	第1部 念仏の開始
	1 懺悔文
	2 般若心経
	3 舍利禮文
	4 光明眞言
	5 御念佛
	6 弘法大師和讃
	7 吞龍和讃
	8 あきやさん
	9 お茶和讃
13:55	休憩(お茶や漬物、煮物などがふるまわれる)
14:30	第2部 念仏の開始
	10 三宝御和讃 (梅花流)
	11 浅間山噴火大和讃
	12 鎌原八番観世御詠歌
	13 戸谷塚天明地藏尊和讃
	14 武洲下小岩善養寺
	15 入定和讃
	16 水子地藏御和讃 (梅花流)
	17 水子地藏御詠歌 (梅花流)
	18 お別れ念佛
15:35	回り念仏終了

性たちは言っていた。御念佛の詩は、「南無阿弥陀仏」の6字の名号を何度も何度も繰り返して唱え、終盤に十三仏の名を唱え、最後にまた南無阿弥陀仏と続く。詩は簡単であるが、節が非常に難しいことが聴いていて分かった。この念仏を1回唱えるのに20分の時間がかかっていた。

昔は、譜面もなく、節だけでなく、詩も耳で聴いて時間をかけて覚えていたという。女性たちは、「昔は、みんな耳から覚えていく。回り念仏に実際に参加して耳で聴いて覚えていった。」「御詠歌は全部難しい。100回くらい聴いたってわからない。」「今は、この譜面があるから助かる。」と言っていた。女性（80代）が「私のおばあさんの頃は、口伝えて覚えた。字が読めなかったためだ。私の母の頃から学校に行って字が解るようになった。」と言っていた。

練習会だけでなく回り念仏も見学した（図4）。2015年6月7日（日）である。回り念仏の開始時刻は13時。終了時刻は15時35分である。休憩が13時55分から入る。後半の開始は14時30分である（表2）。念仏では、正面左に流死者477人の名

が書かれた掛軸、中央に十三仏の掛軸、右に弘法大師の掛軸、3種類を前に掲げて行われる(図5)。流死者477人の名が書かれた掛軸には俗名の他に、家長との続柄、年齢が書かれている。この掛軸は、昭和三十四年(1959)に作られたようだ。掛軸には日付が書かれていた。

回り念仏は、1. 懺悔文から始まり、9. お茶和讃を唱え終わると休憩になる。その後10. 三宝御和讃を唱え始め、18. お別れ念仏まで一気に唱え続ける(表2)。念仏を唱えている間は、絶えず線香を焚き、煙を絶やさない。念仏を唱える女性は、「2時間近く念仏を唱え続けるのが、年寄りには結構大変で疲れる。」「齢をとってくと正座も大変だ。」と言っていた。

回り念仏に参加する上で宗派は関係ない。誰でも参加できるのが回り念仏の特色であるという。しかし、参加している女性たちを見ると真言宗金剛流と曹洞宗梅花流に二分されており、曹洞宗梅花流の女性が多いようだ。これは、現在のように公式に練習会が行われるよりも前、今から50年前の念仏の継承方法が原因となっている。話によると、50年程前、公式に念仏の練習会は行われておらず、念仏を唱える女性たちの中で念仏が上手な女性を師匠として、家を会場に練習会が開かれていた。練習会は、鎌原神社を境に南北に分けられ、南を上、北を下と呼び、2つのグループで2人の師匠が、それぞれ指導を行っていたという。

鎌原神社は、鎌原の中央部に位置している神社である。男性によると「私たちが子どもの頃は、鎌原神社を境に上と下に別れてよく遊んだものだ。鎌原では何かを行う時に、鎌原神社を境によく上と下に分ける。」という。行事や遊びを行う時に鎌原神社を境に分ける傾向があるようだ。

住民の話によると50年前の念仏練習は、鎌原村の上側は、真言宗金剛流で指導が行われ、下側は、曹洞宗梅花流で指導が行われていた。当時は金剛流の流派に属する女性が多かったようで、金剛流の唱え方を鎌原流と呼んでいた。金剛流を鎌原の回り念仏の主流と考えていたようである。その後、梅花流の勢力が拡大し、現在の回り念仏では梅花流の女性

が多数を占める。親から道具を受け継いだという人もいるので、そういう人は、どちらの宗派にも属していない可能性があり、一概には言えないが、女性がどちらの宗派なのかは、所持している鈴の房の色で見分けることができる。金剛流は赤色の房の付いた鈴、梅花流は青色の房が付いた鈴を用いている。梅花流は階級があり、上達すると白色の房に変わるのだという。

では、回り念仏の当日、招かれた女性たちは念仏を唱えるが、当番の家は何をしているのか。この日の当番の家に話を聞いた。当番の家は、お手伝いを雇い、朝から天ぷらや煮物を作り、念仏を唱える女性たちをもてなす準備をする。大鍋を使つての作業は大変で、大忙しなのだという。お手伝いは、たいい親戚が担う。今回の当番も親戚を集めて、鎌原多目的活動センターの台所で天ぷらを揚げていた。天ぷらを揚げていた女性たち(40代)は、「8時30分に集まって準備をしている。」と言っていた。

念仏を唱える女性に、おもてなしに出されるご馳走について聞いた。現在では、念仏が始まる前に「お茶、飴」の2品、休憩の時に「お茶、天ぷら、漬物、煮物」の4品が出される。平成十七年(2005)までは、午前10時から念仏を始めていたため、念仏開始前に、「お茶、煮豆、漬物、飴」の4品、お昼に「お茶、天ぷら、漬物、煮物、うどん」の5品、おやつ時間に「お茶、果物」の2品が出されていた。平成十年(1998)までは、もっと多くのご馳走を出していたという。

出されるご馳走の数に制限を設けたのは、おもてなしの際にかかる金銭的負担を削減するためだという。制限を出す前は、どの家でも好きな数だけご馳走を出せ、もてなすことができた。すると、「我が家は、もっと良いもてなしを」と家同士が競い合うようになってしまい、年々、回り念仏の費用が上がって高額になってしまったという。この時、15万円から20万円の費用が必要だったという。そして、費用が高額になってしまったのを理由に、回り念仏の当番を受け持つ家が減少してしまう事態に陥った。そのため、ご馳走の数を制限することにしたのだという。ご馳走の制限に関する通知は区から出された。

5. 回り念仏の成立

本章では、200年以上も前の災害を伝承している稀有な地域行事である回り念仏が、いつ成立したのかについて調査した結果を記述する。

得られた史料の中で回り念仏の成立に関して最も重要なのは、以下の2点である。いずれも観音堂境内にあった。

文政三年（1820）の木板は、境内にある十王堂と呼ばれる建物内にあった（図8）。十王堂は、葬式用具を収納しておく建物である。木板の文頭には、「天明三卯年七月浅間山よ（力）り押出し前十王同堂流失以多しに（力）付十王同堂建立寒念佛人数」とあった（“力”は、直前の一文字に当てており“かと思われる”多分そう読むという意味である）。浅間山噴火によって前の十王堂が流れてしまったので、再建するために寒念仏を実施したということが記されている。そして、念仏を唱えた15人の女性の名前、建築に携わった人、仏師、木を寄進した人の名前が

書かれている。

安政二年（1855）の木板は、観音堂内にあった（図9）。この木板は、煤で真っ黒だったが、赤外線撮影により、鮮明に文字が判読できるようになった。文頭には、「観音堂十王堂寮修覆二付寒念佛執行人左之通り」と書かれており、観音堂と十王堂を修復するために寒念仏を実施したことが記されている。そして、念仏を唱えた12人の女性の名前、寄進した人と金額、修復に携わった人の名が書かれている。この木板には、念仏を唱えた女性の続柄も書かれ「長三郎妻たへ」「吉右衛門母はる」のように記載されており、女性たちは全員、母や妻であることが分かる。

寒念仏とは、寒夜に俗人が鐘をたたき念仏を唱えながら巡行して、家々に報謝を請う行為という意味であり、俗人とは、僧ではない世間一般の人の意味である。寒念仏を実施することで観音堂や十王堂の

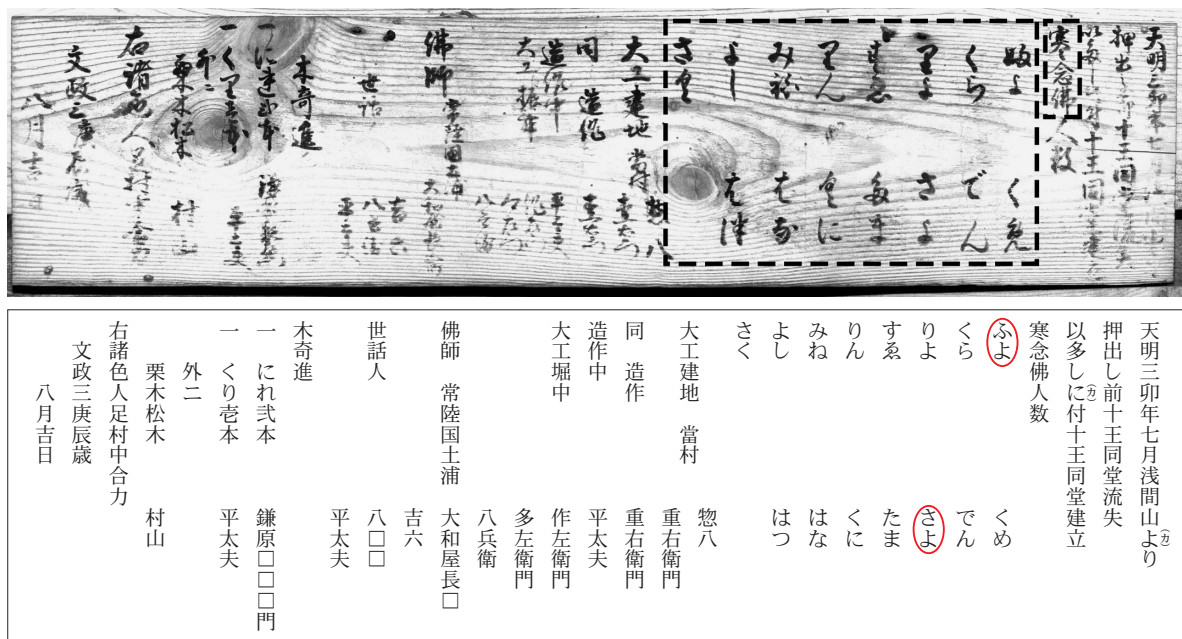


図8 境内の十王堂にあった文政三年（1820）十王堂再建に関する木板。上が木板を赤外線撮影したもの。下が木板を翻字したもの。□は、翻字の際、文字が確認できるが判読不能という意味。（力）は、横の一文字に当てており“かと思われる”多分そう読むという意味である。翻字の際、変体仮名は、現行の仮名に改めている。寒念仏の字と女性の名が書かれている箇所を破線で囲んだ。また、下の翻字した木板上、「飢人夫食拝借小前割帳」で確認できた2名の生存者、「ふよ」と「さよ」を丸で囲んだ。

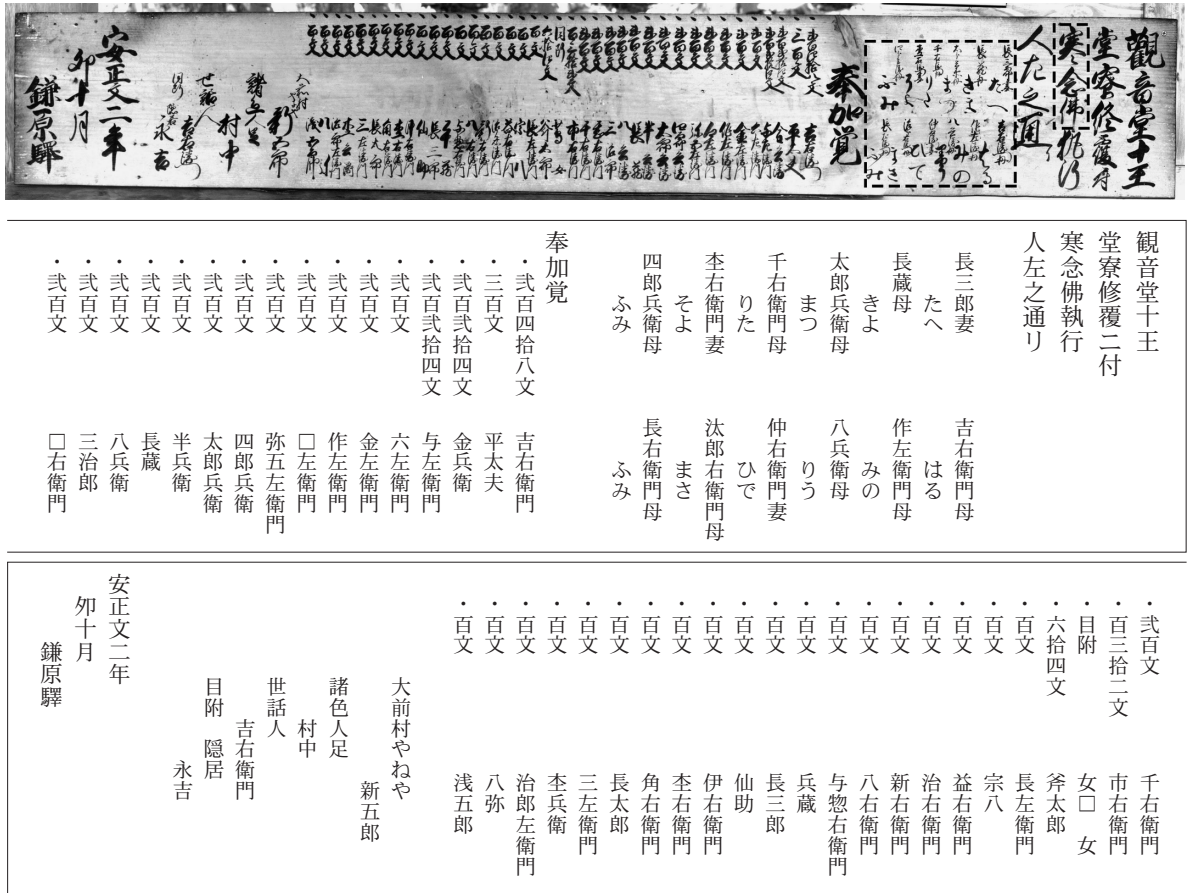


図9 観音堂内のあった安政二年（1855）観音堂十王堂修復に関する木板。上が木板を赤外線撮影したもの。下が木板を翻字したもの。翻字は、寄進表の前半と後半で分けた。寒念仏の字と女性の名が書かれている箇所を破線で囲んだ。

建築や修復の費用を工面していたと思われる。十王堂の文政三年（1820）の木板は、八月に行ったのに寒念仏という言い方をしている点は分からない。

史料は、回り念仏を実施していたことを直接示すものではない。しかし、以下の点を根拠として回り念仏が行われていたと考える。

1. 念仏は、練習しなくては唱えられない。
2. 現在の回り念仏の特徴である女性だけが唱える念仏という共通点がある。

念仏の伝承は、近年まで口伝で行われていて、簡単には継承できなかつたことが分かっている。日常的に念仏を唱えている背景がなければ、仕事として念仏を唱える僧侶ではない一般人が念仏をすぐに唱えるのは無理だろう。また、寒念仏を女性だけが

唱えているという点が、現在の回り念仏は、女性だけが唱える念仏であるという特徴と一致している。

以上より文政三年（1820）には、回り念仏がすであつたと考えられる。そして、1枚目の文政三年（1820）の木板から、5年前、災害から32年後の文化十二年（1815）には、三十三回忌の供養として供養塔が建立された。供養塔には、477人の戒名が彫られている。三十三回忌は、仏教では、特別な節目と考えられている（仏教文化辞典、1989）。三十三回忌は、災害に遭い、復興が始まって以来、初めて盛大に行つた供養だったのであろう。回り念仏は、災害に遭い、復興を終え、一段落した、文化十二年（1815）の三十三回忌頃に、流死した477人の供養として始められたと思われる。

表3 飢人夫食拝借小前割帳にある情報を性別と題名、匿名で分けた表。小前割帳には、性別の分からない者が他に1名おり、合わせて96名の情報が書かれている。帳面の最後に人数93人とあり、数が合っていないが、理由は分からない。

	題名	匿名	計
男	25	26	51
女	10	34	44
木板に名前のある人数	2	7	9

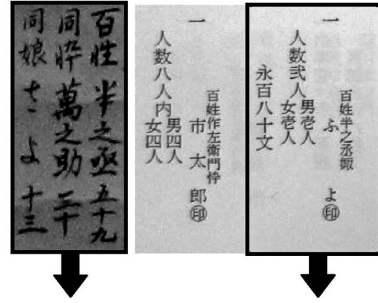
3.4倍 単位：人

2枚の木板のうち1枚目、災害から37年後の文政三年（1820）の木板で念仏を唱えている15人の女性の中に、災害の生き残りが2名確認できた。木板の右上先頭の「ふよ」と右下三番目の「さよ」である（図8）。

生存者の情報は、災害後の鎌原の生存者93人に食料を貸し付けたことを書いた「飢人夫食拝借小前割帳」から得た。今回は、児玉（1989）に記載されているものを使用した。史料には、代表者の名前、代表者と家長との続柄、その家の生存者の性別と人数が書かれている。代表者は、概ね男性であり、女性の名前は、44人中10人しか分からない。一方、男性の名前は、51人中25人が分かる。名前の分かる女性10人のうち、災害から37年後の文政三年（1820）の木板に名前があるのは、「ふよ」と「さよ」の2人である。この木板で2人しか確認できなかった理由は、名前が分からない女性の生存者が、木板に書かれているからだと思われる。

生存者を性別と題名、匿名に分けて表にした（表3）。女性44人中、名前が分かるのが、10人。残り34人は分からない。10人中2人が、木板で念仏を唱えている。匿名の女性は、題名の女性の3.4倍いるので、匿名で念仏を唱えている女性は、7人になる。合わせて、生存者のうち9人の女性が、文政三年（1820）木板にいと単純計算することができる。この木板に書かれている15人の女性は、全員が災害を免れた生存者である可能性がある。

文政三年（1820）の木板で念仏を唱えている女性が、全員生存者であるとするなら、この寒念仏は、十王堂の再建のための資金集めだけが目的ではなく、



性別	名前	年齢	続柄	職業
男	(半之丞)	59		百姓
男	(萬之助)	30	同悻	
女	(さよ)	13	同娘	
女	ふよ	—	半之丞姫	
男	—	—	—	

() は流死者

図10 再現した半之丞家の家族構成。左上が、流死者の名が書かれた掛軸。右上が、飢人夫食拝借小前割帳。

流死者477人の供養のために、生存者の女性だけで構成された集団が唱える、特別な念仏であると考えられる。普通の寒念仏を行うのであるなら、唱える人を生存者の女性に限定する必要はない。回り念仏は、流死した477人の供養を目的に行われるが、この寒念仏もおそらく供養を目的に行われており、回り念仏の一端をなすものであったと考えられる。

生存者の情報が書かれている「飢人夫食拝借小前割帳」と、回り念仏で使用する死者の情報が書かれている「流死者477人の名が書かれた掛軸」の情報を照らし合わせることで、災害前の家族構成を再現することができる。文政三年（1820）の木板で寒念仏を唱えていた「ふよ」の家族を再現した。死者を()で表現した（図10）。

「ふよ」は、半之丞家の嫁さんで5人家族、災害で3人を失っていることが分かる。嫁とは半之丞から見た場合、半之丞の息子の女房という意味になる。この場合、「ふよ」は、半之丞の息子の妻であったと考えられる。流死者477人の流死者の名が書かれた掛軸を見ると、妻は、全員、夫よりも年下であることが分かる。「ふよ」は、夫の「萬之助」より年下だろうと思われる。よって、「ふよ」は、



図11 観音堂境内にある三十三回忌供養塔。左が全体像、4面に477人の戒名が刻まれている。右が供養塔の正面下側の拡大図。

災害当時、20代であり、37年後の文政三年（1820）の木板で念仏を唱えている時の年齢は、おそらく60代であると考えられる。

以上より、回り念仏は、三十三回忌の文化十二年（1815）頃に成立したと思われる。災害の記憶が残っている時に、災害を免れた生存者によって、流死した477人の供養として回り念仏は始められたと考えられる。災害直後は、各家の財力や気持ちにも余裕はないが、災害を免れた女性たちが、高齢になった頃には、回り念仏をする余裕も出てくるはずだ。三十三回忌頃は、回り念仏を始める時期として適当であると考えられる。

6. 流死者供養の変遷

本章では、鎌原にあった木板や石碑、住民から借りた古記録、写真、住民への聞き取り調査の結果から明らかにした供養の変遷について述べる。

噴火から32年後の文化十二年（1815）七月八日に流死者供養塔が建立された。供養塔の4面に土石なだれで流死した477人の流死者の戒名が刻まれている。供養塔の正面下側には、「天明三癸卯八月八日下刻 淺間山火石泥砂押出於當村 四百七十七人流死 爲菩提建立 文化十二年乙亥歲七月八日」とある（図11）。

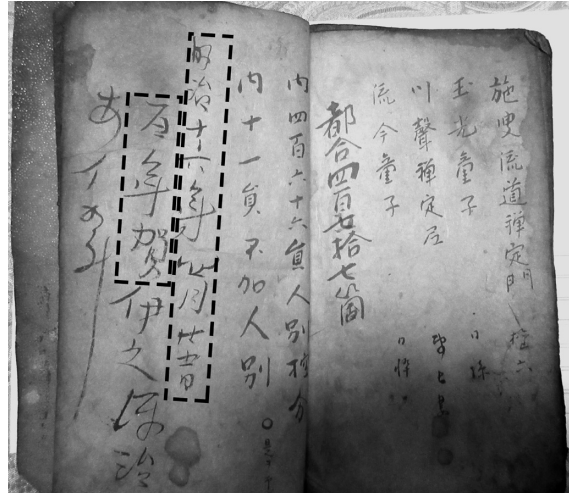


図12 住民に借りた流死者戒名帳。左側の頁の端に「明治十六年四月廿五日百年賀」と記されている。記されている場所を破線で囲んだ（土屋きくろ氏提供）。

法要について仏教文化辞典は、法要は、葬儀に始まり、七十七日の法要、百か日、一周忌、三回忌、七回忌、十三回忌、十七回忌、二十三回忌、二十五回忌、二十七回忌、三十三回忌、そして間を空け、五十回忌、百回忌、その後50年ごとに行っていく。今日の慣行としては、三十三回忌を最後の供養とする地方が多い。また、三十三回忌は、死霊が精霊になる特別な節目と考えられており、塔婆などを建てて供養するとある（仏教文化辞典、1989）。

以上の説明から三十三回忌は節目として重要な回忌法要であり、鎌原に三十三回忌供養塔が建立された理由も納得できる。文化十二年（1815）の三十三回忌供養は、供養塔も建てられ盛大に行なわれたと思われる。

噴火から100年後の明治十六年（1883）四月二十五日には、山崎儀平太宅で百回忌の記念式典が行われたことが記録されている。記録は、鎌原の流死者477人の名が記載された浅間山噴火流死人戒名帳の端に、「明治十六年四月廿五日百年二相当し山崎平太夫当時儀平太殿宅二於テ百回忌之供養相営候」と加筆されている（萩原、1995）。今回の調査で住民に借りた上記とは別の流死者戒名帳（図12）の端には、「明治十六年四月廿五日百年賀」と加筆され

浅間山噴火大和讃

歸命頂礼鎌原の 月の七日の念仏を
由来を委しく尋ぬれば 天明三年卯の年の
四月初日となりければ 日本に名高き浅間山
俄かに鳴動初まりて 七月二日は鳴り強く
夫れより日増に鳴りひびき 砂石をとばす恐ろしき
ついに八日の巳の刻に 天地も崩るるばかりにて
噴火と共に押し出し 吾妻川辺銚子まで
三十二ヶ村押し通し 家数は五百三十余
人間一千三百余 村人あまたある中で
一のあわれは鎌原よ 人畜田畑家屋まで
皆泥海の下となり 牛馬の数を数うれば
一百六十五頭なり 人間数を数うれば
老若男女諸共 四百七十七人が
十萬億土へ誘われて 夫に別れ子に別れ
あやめもわからぬ死出の旅 残り人数九十三
悲しみさげふあわれさよ 観音堂にと集まりて
七日七夜のその間 吞まず食わずに泣きあかす
南無や大悲の観世音 助け給えと一心に
念じ上げたる甲斐ありて 結ぶ縁もつき果てず
隣村有志の情にて 妻なき人の妻となり
主なき人の主となり 細き煙を営み
泣く泣く月日は送れども 夜毎夜毎の泣き声は
魂魄この土に止まりて 子供は親を慕いしか
親は子故に迷いしか 悲鳴の声の恐ろしき
毎夜毎夜のことなれば 花のお江戸の御本山
東叡山に哀訴して 聖の来迎願いける
数多の僧侶を従えて 程なく聖も着き給い
施が鬼の段を設ければ 餓りの人々集まりて
皆諸共に合掌し 六字の名号唱うれば
聖は数珠を爪ぐりて 御経読誦を成し給う
念仏施餓鬼の供養にて 魂魄無明の闇も晴れ
弥陀の浄土へ導かれ 蓮のうてなに招かれて
心のはちすも開かれて 泣き声止みし不思議なり
哀れ忘れぬその為 今ぞ七日の念仏は
末世に伝わる供養なり 慎み深く唱うべし
南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏
明治初年 滝沢对吉 原作
鎌原司郎 補正

図13 明治初年に滝沢对吉が作った浅間山噴火大和讃。鎌原司郎が補正している。天明三年浅間山噴火史、萩原（1982）より作成、加筆。

ていた。「賀」という文字には「祝い」の意味があり、100年の祝い事をしたという意味だと思われる。萩原（1995）の戒名帳に記されていた百回忌の実施日と同じことから、住民に借りた戒名帳も明治十六年（1883）四月二十五日に百回忌の記念式典を催したことが記してあると考えられる。2つの別の史料から百回忌を催したという記録が確認できた。明治十六年四月二十五日に百回忌の記念式典を行ったのは確かだと思われる。

回り念仏の際に唱える念仏として注目されるのが、明治初年に鎌原の住民である滝沢对吉が作った「浅間山噴火大和讃」である（図13）。この和讃は、「月の七日の念仏を由来を委しく尋ぬれば」と七日に念仏を唱える由来はなぜかと問いかける形で始まり、天明三年浅間山噴火で鎌原では477人の村人が死んだ、彼らの魂を慰めるために僧侶と人々が念仏を唱えた、今ある七日の念仏は末世に伝わる供養だから慎み深く唱えなさい、といった説明が歌となっている。七日に唱える念仏という点が、現在の回り念仏の実施日と一致している。浅間山噴火大和讃は、「過去天明三年浅間山大噴火の犠牲者を弔う所の至心参詣の香煙先祖代々菩提のために唱え奉る浅間山噴火記念御和讃に」の前置き文言の後に唱えられる。作成時期は明治初年となっている（萩原，1982）が、以

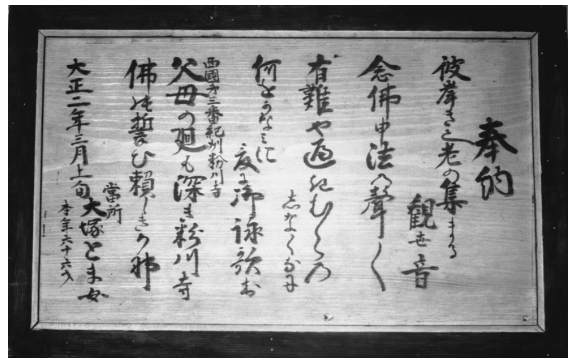


図14 大正二年（1913）御詠歌奉納木板の赤外線撮影画像。鎌原の女性が66歳の時に奉納した3種の御詠歌が書かれている。

下の点を根拠に百回忌の祭典で発表されたと考えた。

1. 浅間山噴火大和讃を唱える前置きの文言に「浅間山噴火記念御和讃」とあることから、浅間山噴火記念に和讃は作られたことが分かる。
2. 浅間山噴火大和讃の作られた明治初年の時期に、山崎儀平太宅にて百回忌の式典が行われている。

浅間山噴火大和讃は、浅間山噴火の記念に作られたことが分かる。記念に作ったのなら、その和讃をどこかで発表するだろう。発表する機会を考えると、



図15 百七十回忌供養の様子を写した写真。左上の写真下には、「27.6.8 浅間大噴火170年記念当日 33才」と書いてある（霜田恵子氏提供）。

浅間山噴火大和讃が作られた明治初年と同じ時期に儀平太宅で百回忌の供養が行われている。よって、百回忌に浅間山大和讃は発表されたと考える。

噴火から130年後の大正二年（1913）の木板には、3首の御詠歌が書かれている（図14）。この木板は観音堂内にあった。彼岸に鎌原の女性が3首の御詠



図16 百七十五回忌に観音堂内で経を読む寛永寺の和尚。南木山史，浅間山麓誌，群馬県吾妻郡嬭恋村嬭恋寺報同志会，1961（霜田恵子氏提供）。

歌を奉納したことが記されていると考えられる。御詠歌とは、31文字で作られ、鈴の音に合わせて唱える歌のことである（櫻井，1980）。1首目「彼岸きて老の集まる 観世音 念仏申法の聲」は、彼岸にお年寄りが観音堂に集って念仏を唱えているという意味だと思われる。2首目「有難や遍にむくろの しなくなに 何をかなみに 友に御詠歌す」は、前半の意味はよく分からないが、御詠歌を唱えていることが分かる。3首目「父母の廻も深き粉川寺 佛の誓ひ頼しきかな」は、西国三番札所の粉河寺の御詠歌の引用だが少し異なっている。粉河寺の御詠歌は、「父母の恵みも深き粉河寺 仏の誓ひたのもしの身や」である。「恵み」が「廻」、「たのもしの身や」が「頼もしきかな」に変わっている。3首目も意味は分からない。しかし、1首目と2首目から彼岸に念仏を唱えていることが分かる。現在、念仏を唱える女性たちは、3月の春の彼岸になると観音堂に集まって、念仏を唱え供養を行っている。この木板から大正二年（1913）には、彼岸に観音堂に集まって念仏を唱える習慣があったことが分かる。

噴火から149年後の昭和七年（1932）に百五十回忌、169年後の昭和二十七年（1952）に百七十回忌、174年後の昭和三十二年（1957）に百七十五回忌、供養の式典が行われた記録が残っている（鎌原区・鎌原観音奉仕会，1992）。百七十回忌と百七十五回忌は、上記の史料とは異なるそれぞれ別の史料に様



図17 伊勢崎市戸谷塚町での慰霊祭の様子。鎌原の人たちは、バスを貸し切って高速道路を使って伊勢崎に向かう。会場の座布団や莫蔭は、鎌原の人たちが到着する前に用意されている。天明四年（1784）に供養のために建立した地蔵を破線で囲んだ。



図18 伊勢崎市境町中島の供養の様子。供養碑を破線で囲んだ。

子を写した写真が残されていた。百七十回忌の供養は、昭和二十七年（1952）に鬼押出しで行われたようだ。鬼押出し溶岩とバスが写っており、住民はバスに乗って鬼押出しの所まで来たと思われる。女性が地面に座り念仏を唱えている。数人の僧侶も写っている。写真から多くの人が式典に訪れていることが分かり、供養は盛大に行われたと思われる（図15）。百七十五回忌は、寛永寺の僧侶が観音堂内で経を読む様子が写されていた（図16）。

供養は鎌原地区内だけに留まらない。噴火から179年後の百八十回忌にあたる昭和三十七年（1962）からは、年に1度、旧暦十月九日に伊勢崎市戸谷塚町に供養へ赴く（図17）。百八十回忌記念として萩原進が撰文した石碑が戸谷塚町にある。土石なだれば、吾妻川に流入し利根川に合流し、太平洋まで流れ込んだ。多数の遺体が両岸へ打ち上げら

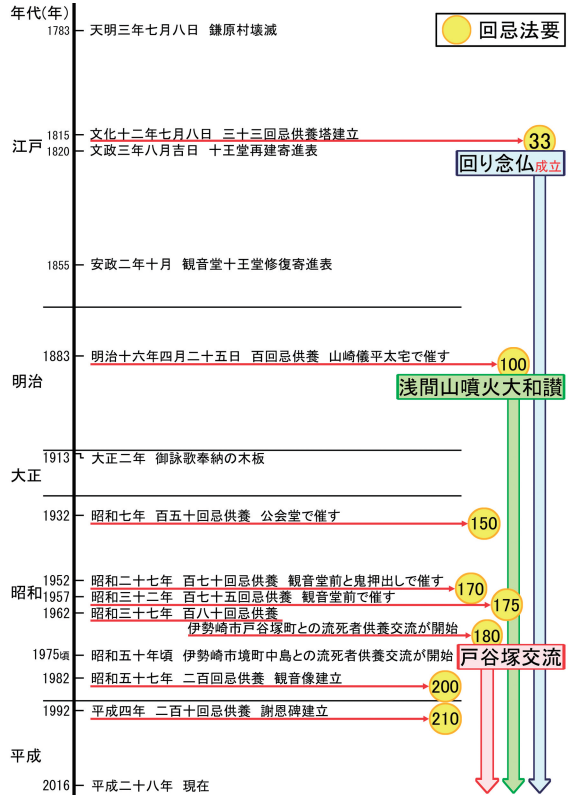


図19 鎌原における供養の変遷に関する年表

れた（萩原，1982）。遺体は戸谷塚にも流れ着き、その遺体を葬ったのが当時の戸谷塚村民であったことから交流をしている。

戸谷塚には、天明四年（1784）十一月四日に戸谷塚村民が供養のため建立した地蔵がある。慰霊祭には、鎌原区長、戸谷塚町区長、鎌原観音堂奉仕会会長、孀恋村老人クラブ連合会会長など多くの人が参加する。戸谷塚では、回忌念仏で唱える18種類の念仏のうち、戸谷塚天明地蔵尊和讃、浅間山噴火大和讃、鎌原八番観世御詠歌の3種だけを唱える。午前11時に供養が始まり、午前11時半には終わる。その後は、徒歩1分の所にある戸谷塚住民センターに集まり、茶、けんちん汁、寿司を囲んで戸谷塚の人たちと共に談笑をする。談笑は1時間弱で終わる。

昭和五十年（1975）頃からは、伊勢崎市境町中島とも交流している。境中島にも遺体流れ着き供養

してもらったという縁があり供養塔がある（図18）。供養は、戸谷塚の供養を行った日に続けて行われる。鎌原の人々は当初、境中島に土石なだれの被害者を祀った慰霊碑があることを知らなかった。戸谷塚で合同の慰霊祭をしているということを目にした境中島の人が、鎌原の人に慰霊碑があることを伝えたのが慰霊祭の始まりである。慰霊祭は午後1時に始まり、午後1時15分に終了した。戸谷塚の慰霊祭とは異なり、般若心経を唱え焼香をして終わる。

その後、噴火から199年後の昭和五十七年（1982）に二百回忌供養が行われ、観音像が境内に建立された。供養は盛大に行われた記録が残っている。二百回忌供養を催すにあたり、2年前の昭和五十五年（1980）から天明浅間押二百年記念事業実行委員会が設立されている。委員長に孀恋村長、副委員長に孀恋村議会議長、鎌原区長、孀恋村教育委員会、孀恋村文化協会会長が選任されている。観音像建立由来の石碑の撰文は、萩原進が請け負った（天明浅間押二百年記念事業実行委員会、1982）。鎌原区内だけでなく、孀恋村も記念事業に加わっている所を見ると供養は大規模なものだったのだろう。その時の式次第が記録されていた（天明浅間押二百年記念事業実行委員会、1982）。

平成四年（1992）に二百回忌供養を行い、境内に謝恩碑を建立した記録が残っている。

以上の調査で得られた供養の情報を表にした（図19）。前述したが、今日の慣行では三十三回忌を最後にすることが多く、五十回忌以降は一般化していない（仏教文化辞典、1989）。この情報をもとに鎌原の供養の変遷を見ると、五十回忌以降も継続して、頻繁に節目の回忌法要を行ってきた鎌原は、珍しいと言える。さらに、鎌原では、節目の回忌法要の時に浅間山噴火大和讃や石碑など、何か記念となる作品を残す傾向があるようだ。

7. まとめ

回り念仏は、文政三年（1820）より前から存在していたと推定できた。回り念仏の成立は、文化十二

年（1815）の三十三回忌頃ではないかと思われる。回り念仏は、災害のあと間をおいてではなく、災害に遭い、復興を終え、災害の記憶が残っている時に、災害を免れた生存者によって、流死した477人の供養として始められたと考えられる。供養の変遷から鎌原では、節目の回忌法要も行われてきたことが確認できた。

鎌原の災害伝承は、回り念仏による継承と節目ごとの回忌法要によって、人々の記憶から忘れられることなく、200年を超えて伝承されている。

謝辞

この論文は、井上が2016年2月に群馬大学大学院教育学研究科へ提出した修士論文をわずかに変更したものである。駿河台大学メディア情報学部の野村正弘教授、群馬大学教育学部の小林正行准教授、群馬大学図書館の土師守氏には、史料解説を助けていただいた。群馬大学教育学部の関戸明子教授には、研究方法に助言をいただいた。鎌原観音堂奉仕会会長の宮崎典雄氏、鎌原郷司氏、黒岩ミハル氏、霜田恵子氏、土屋きくみ氏、土屋博義氏、横沢英子氏をはじめとする鎌原住民のみなさま方には、さまざまな情報を提供していただいた。ここに深く感謝し、御礼申し上げる。

参考文献

- 児玉幸多（1989）：天明三年浅間山噴火史料集，上東京大学出版会，10-12。
- 萩原 進（1982）：天明三年浅間山噴火史。群馬県吾妻郡孀恋村鎌原観音堂奉仕会，75p。
- 萩原 進（1986）：浅間山天明噴火史料集成Ⅱ，記録編（1）。群馬県文化事業振興会，348p。
- 萩原 進（1995）：浅間山天明噴火史料集成Ⅴ，雑編。群馬県文化事業振興会，354p。
- 仏教文化辞典（1989）：仏教文化辞典。初版第一刷発行，株式会社佼成出版社，719-720。
- 鎌原区・鎌原観音奉仕会（1992）：天明の災にかがやく恩恵。61-62。
- 三枝恭代・早川由紀夫（2001）：孀恋村鎌原における天明三年（1783年）浅間山噴火犠牲者供養の現状と住民の心理。歴史地震17巻，39-47。

野村正弘（2016）：改造したコンシューマ向けデジタルカメラを用いた墨書の赤外線撮影。メディアと情報資源，駿河台大学メディア情報学部紀要，第23巻，第1号，9-21.

櫻井徳太郎（1980）：民間信仰辞典，東京堂出版，p116.

佐藤清一（1961）：南木山史，浅間山麓誌。群馬県吾妻郡嬭恋村嬭恋時報同志会，37p.（非売品）

天明浅間押二百年記念事業実行委員会（1982）：天明浅間押二百年忌記念誌，82p.

